

ひとはりごとに悲びをこめ、
ひとはりごとに願ひをかけ、
やがて、わが
喪の肩かけの編みあがらば……

ひとりの少女、
喪の色につつまれて、
亡き東京を偲ばむがため」

大正12年10月9日
令女界2-12

春の挨拶

また一つ、よき人どちに
新な春はめぐりきて、――

おん母に、
よき袖絡きて嬌えてし、

昨日の君もいつしかに、
十六のをとめとなりて、
たをやかに。

相見ては
含羞ぐせの君もはや
黒髪ぶりのふりはへて
十七のをとめとなりて
はしけやし。

この日ごろ、
もの、あはれを知る故の
哀しき詩のしげしとて
歎ける君も今日はとて、
十八のをとめとなりて、
蕩たしや。